『アフリカのキリスト教』を読んで
―ひとつの解釈の試み―

95E093　高　橋　友　美

「アフリカの年」と言われた1960年以来、ヨーロッパ列強の植民地支配を覆して、次々と独立国が誕生していった。これに伴いブラック・アフリカへの関心も高まり、我が国においても、その全貌を明らかにしようとする試みが精力的に行なわれてきたようである。しかし、この本の翻訳者である斎藤忠利氏は、アフリカにおいて表裏一体を成しているキリスト教分布に関して言うなら、実体を知ろうとする努力は不十分であったと記している。確かに、アフリカ独立については様々な本やテレビ番組で目にする機会も比較的多く、ほとんどの人たちが知っている歴史だと思われる。だが、この背後(独立に限らずアフリカ人の生活全体)にはキリスト教との密接な関わりがあった事実を、果たしてどれほどの人が熟知していただろうか。少なくとも、アフリカのキリスト教は近年急速に成長を遂げたものだと軽く考えていた私は、この本を読むことで、日本とは異なる、いわばアフリカ流のキリスト教信仰を知り、アフリカ人の生き方にも興味が沸いた。そしてこの時初めて、広い視野でキリスト教を眺めることができた気さえした。

キリスト教会は現代アフリカ全体の中で、どのような位置にあるのか。それはどれほど事件の流れに影響を及ぼし、どれほどの力を持ち、そして行使するのか。――それは各国の教会の大きさと広がり具合に左右されるものであり、教会の役割も多様であるので、容易には答えられない質問と言える。例えば、カトリック教会はザイールでは政府と相対して全く別の立場にある。ガーナではメソジスト派と長老派は諸教会の中で最もしっかりとしている教会で、特に南部に信徒が多い。また、植民地時代の国家・教会の関係パターンは、イギリス領、フランス領、ベルギー領、ポルトガル領とではかなりの違いが認められ、独立後はそれ以前の関係の半ば継続、半ば逆転となる傾向があった。つまり、キリスト教の影響力の大小は場所や時代によって様々だ。だが、政府とミッション系教会との間には何らかの協約があった。そして、同時にアフリカの抱える課題とも関連している点で共通している。

第一に、人種差別問題が挙げられると思う。私にはとりわけカトリックの聖職団からアパルトヘイト政策の様々な面を非難する一連の重大声明があったことが印象的であった。しかし現在、80パーセント以上が黒人会員で構成された教会で、20人の管理司教の内、黒人は一人、もしくは皆無であることが当然と考えられている一例があることからも、白人支配の慣行を未だ認めざるを得ないと感じた。差別は教会の内外を問わず、根強く残る厄介な習慣であるようだ。

第二に、貧困の問題が思い浮かぶ。殊に南アフリカでは南北問題が深刻であり、これは1975年のニエレレ氏の公式演説によっても裏付けられるだろう。この地で裕福な生活を送れるのは限られた少数派であるが、彼らとキリスト教にも関係が見出せた。国家と教会双方の指導者のほとんどはミッション・スクールで教育を受けた者たちであるそうだ。重要な革新の力を担う

エリート教育と雇用のネットワークから現在のアフリカが営まれていると言えるかも知れない。そこでは飢餓に苦しみ毎年多くの死者が存在する傍ら、大統領から大司教にメルセデスを一台贈る程に贅沢な暮らし向きも、同時に成立している事実が見え隠れしている。この国ではよい家柄に生まれ、ミッション・スクールに通うことが金持ちになる第一歩なのだろうか。どちらにせよ、この不平等な現実が悲しく思われるのは、私だけではないと確信する。

第三に、政治及び経済面である。これは教会側と政府側がしばしば対立の関係になることからも見て取れる。全体主義思考の政府にとって、教会をライバル視するのも無理はない。教会は高い霊的な要求と牧師たちの多くの献身ぶりとによって、威信を失わずに人々を効果的に動員する能力があるからだと筆者は原因解明する。なるほど政府が非能率や汚職状態に陥った時はまさに、右・左翼や一政党にかかわらず、別の見解を提供している教会は、大衆にとって魅力的でありうることは私にも容易に推測できる。政治、経済に直接関与していることは、アフリカとキリスト教の結びつきの強さを示していると思う。

現代のみならず、16、17世紀のアフリカとキリスト教もまた興味深い。いかなる社会も病気に関する理論と実際の医療行為の両方がなければ立ち行かないそうであるが、アフリカ社会もその例外ではなかった。何らかの病気に直面すると、人間は何か実際的な行動とその事態を説明する哲学の二つを必要とする。その哲学によって、死や病などのあらゆる形の不幸が関係づけられることで、何とか耐えられるものとなるのである。それによって事の要因と折り合いがつけばよいのである。ガーナやナイジェリア、ケニアや南アフリカには予言者や癒しの教会が何千と存在する。中には濃厚な恍惚状態を招く暴力的なまでの療法に加えて、大変な絶叫、夢幻状態のような振る舞い、按手の繰り返しといった方法を用いるものもあれば、穏やかな治療の方法が用いられることもある。そして霊的治癒のためのカリスマ的霊性教会は会員数も安定し、増加する傾向だそうだ。日本とは幾分異なったアフリカ的思想が存在し、そこでのキリスト教の在り方もまた特徴的であることに改めて気づかされた。

今も昔もアフリカとキリスト教は互いに影響し合っていた。同じキリスト教であっても国によって解釈の仕方や用い方、信仰の意義や方法にも少なからず違いがあることが分かった。自分たちの考え方に最も合った形で宗教を生活の一部に組み入れ、そのことによって営みに潤いを与え、少しでも多くの豊かさを感じることができるなら、素晴らしいことであり、理想に値するだろう。そして現存するアフリカの問題についても、キリスト教を信仰することによって、宗教の力で解決に近づけることができたらすごいのにと思う。また、これを望む。

テキスト

A．ヘイスティングス『アフリカのキリスト教』斎藤忠利訳、教文館、1988年